

# 総記

柴田武

「総記」として書くべきことは次の二項だと考える。

## (1) 展望の展望

(2) 諸科学の中の国語学

前者については、さらに次の二項に分けて述べることにしたい。

### (i) 「展望欄」の歴史的展望

### (ii) 本輯の「展望」の展望

まず(i)について。雑誌「国語学」はすでに第五輯(昭二五)から展望のような記事を設けている。しかし、第五輯では、なんと「国語問題」「国語学一般」「方言学」という三本の柱から成る簡明な組織であった。その後、毎年この種の記事が設けられたが、現在のように、隔年の企画になったのは、第四十九輯(昭三七)からであり、その時から本輯まで十回に及んでいる。いま本輯(一一一輯)を基準にして第四十九輯までさかのぼって歴史的に展望してみたいと思う。ただし、比較の便宜上、さらに第三十輯までさかのぼらせることにする。

この歴史的展望によって期待できることは、われわれまたはわれわれの先輩が国語学という学問の範囲と内容をどう考えて来たかがわかることと、今後いっそういい展望計画を立てるのにはどうした

らいいか、暗示が得られることである。

一覧表によって観察されることは次のようなことである。

(ア) 展望欄の構造は第一期と第二期とで異なるところがある。第三十輯(昭三一)から第五十七輯(昭三九)までが第一期、第八十一輯(昭四五)から本輯(昭五五)までが第二期、そして、第六十五輯(昭四一)と第七十三輯(昭四三)が過渡期である。研究資料、数理的研究、言語理論の項目は第一期にはなかったもので、第二期に始まって今日まで続いている。研究資料の項目ができたのは、複製・複刻本・索引などが盛んに刊行されるようになったことと無関係ではあるまい。数理的研究については、「計量国語学」が学会を持ち、雑誌を出すようになったので独立の項目を与えられたのである。しかし、分類基準からいうと、これだけが「方法」であって、孤立している。数理的方法は文法にも語彙にも他の分野にも適用できるからである。このことは本輯の展望執筆者も十分に意識している。言語理論という項目があるのは、いまだに国語学が「言語学」から理論をもらおうという態度を持ち続けているためとも見られる。国語学も言語学なのだから、言語理論は国語学の文法にも語彙にもその他の分野にも認められるはずのものである。言語

年 象 対	121	113	105	97	89	81	73	65	57	49	42	38	35	30
総記														
国語学史	A	A	A	A	A	A(4)	A	A(7)	A	A	A	A	A	A
国語学史料	B	B	B	B	F	H			I	K	B			
国語学資料			C											
国語資料	C	C		C			B	C(8)		B(8)		B	F	C
現代語							C	D(9)						
文法	D	D	E	D	C	D			D	G	D	E	D	D
音韻	E	E	F	E	D(1)	E(1)			E(4)	H(4)	F(1)	F(1)	E(1)	E(1)
文字・表記	F	F	G	F	B(2)	B(2)			B(2)	E(2)	E(4)	D(1)	C(4)	F(4)
音声分析	G	G	H	G		C		G	C	F				
文章・文体	H			H	E				G	J				
言語生活	I	H	I	I	J	F	F	H	F(4)	I(4)	I	C	I	I
方音	J	I	L	K	I	G	G	E	H	L	C(4)	I	B(4)	B(4)
数理的研究	K	J	K	J	H(3)	I(5)	E(6)	F(4)						
言語理論	L	K	D		G		D	B		D				
国語教育								I	J		H	H	H	H
国語政策								H	K	C	G(4)	G(4)	G(4)	G(4)
国語問題														
下位項目数	17	15	15	14	14	13	8	11	18	20	10	10	9	9

注 A B C ……は各輯中の項目の順序を示す。以下タイトル名の違うものをあげる。

- (1) 語彙・意味 (2) 音意・音韻 (3) 数理言語学 (4) はじめた (5) 計量国語学 (6) 数理言語 (7) 学会二
- 年の歩み (8) 古代・近代 (9) 現代 (10) 国語の計量・数理 (11) 語彙・語誌 (12) 意味・語行爲・言語生活 (13) 算
- 料・辞書・索引 (14) 音韻および文字 (15) 方言学 (16) 国語問題 (17) 方言研究 (18) のあゆみ (19) 方言研究界 (20) 算

理論は上から下りて来ることもあるが、下から、すなわち、「国語学」から「言語学」へ上っていくこともあるものだと思う。

次に、第一期には国語教育、国語政策・国語問題の項目があった。これは、終戦直後の国語施策の影響もあり、当時の時枝誠記代表理事の関心ともつながっていたと思う。

もう一点、第二期では、国語史または上代・近代・現代という分類と文法・語彙・音韻……といった構造による分類とが同居していたことがあって、分類として一貫性を欠いていた。それが、第二期では、構造分類が上位に、時代区分が下位に置かれて、筋が通るようになった。

(イ) 第三十輯以降ずっと続けている項目は、総記・言語生活、方言の三つだけである。「言語生活」が早い時期から項目として出ているのは、昭和二四年から始まった国立国語研究所の言語生活研究を受けているもので、世界の言語関係学会誌の中で一つの特色とされるものだと思う。なお、第六十五、七十三輯(過渡期)を除けば、「文法」「語彙」も項目として定着している。

(ウ) 音韻は、初め「音韻(および)文字」となっていたのが、「音声・音韻」(のちに「音韻」と「文字・表記」とに分化する。「文字・表記」が項目として定着しつつあるのも世界の言語関係学会誌の中で特色とすべきである。日本語の研究として当然のことだけれども。

(ク) 「文章・文体」は第四十九輯から始まるが、途中ときどきとぎれている。一項目として立てるほど研究物がないと見られたためか。「音声分析」は一回だけで消えたが、これは、音声学会・音響学会など他の学会でとりあげられれば、実際には十分であろう。

(カ) 項目の名称が語彙と数理的研究についてはたびたび変って来ている。若い分野のためであろう。語彙については、「語彙・意味」→「語彙・語誌」→「語彙」と変り、数理的研究については、「国語の計量・数理」→「数理言語」→「計量国語学」→「数理言語と計量的研究」→「数理的研究」と変っている。

(ク) 一覧表の項目はいわば大項目で、実際には、さらに、たとえば、文法(史的研究—古代)、文法(史的研究—近代)、文法(理論・現代)のように三つの下位項目に分かれている。こういう下位項目の数は執筆者の数でもある。いま、この数を比べてみると、第三十輯が九項目だったのが本輯では十七項目にふえている。途中で十八項目、二十項目になったこともあるが、全体として、確実に細分化と専門化が進んでいる。本輯の展望執筆者のひとり佐治圭三氏は、本文のなかで、「対照研究」という項目を設けることを提唱している。もっともと思うが、こうして細分化はとどまるところを知らないようである。

細分化と専門化は学問の進歩とも考えられるが、一方で危険もはらんでいる。全体が見えなくなるばかりか、専門分野からはずれた、少し広い範囲のことさえ見通せなくなる。本輯の展望執筆者鈴木丹士郎氏もこのことを指摘している。

この道はすでに自然科学がたどった道で、自然科学はもはや学際化を図らなければ立ちいかなくなっている。国語学でも、今日、もし第五輯のように三項目しか立てないとしたら、果して各項目の執筆を引き受ける会員がいるだろうか。国語学のバランスのとれた進歩のためには、いつかは、こうした広い視野と細かい情報網を持った執筆者によって展望されるべきだろうと思う。

さて、次は、(ii)本輯の「展望」の展望である。この部分を書くために、すべての原稿が出そろった段階で、全部に目を通すことを考えた。現在、まだ一篇は手もとにないけれども、しめきりも過ぎているので、急いで、これらの原稿から学んだこと、触発されたことを順不同に述べることにしよう。

まず第一に指摘しなければならぬことは、歴史時代の各段階についての研究はあるが、時代を通した通時的研究があまり見当たらないことである。ただし、国語学史だけは別で、ここでは最近通時的研究が盛んになり出したという。

かつて、ハーバード大学のK・ティーター教授が拙宅を訪れて最初に口にしたことは、国語学には歴史的研究がないですね、ということだった。残念ながら、これは認めざるをえない。おそらく国語研究資料の発掘が進めば進むほど、また各時代の研究が深まれば深まるほど、通時的研究は「こわくて」とても手出しできないということだろうと思う。しかし、資料的には多少粗いところがあっても、時代を通じての研究をもっと進めなくてはならないと思う。国語学が他の学問におかされない最後のとりでの一つでもあるからである。ただし、系統論も通時的研究の一つだとするならば、これはこの二か年に関係書が約十五冊も出版されたほど華々しかった。文法の研究では、史的研究では活用の研究、抄物の研究が目立つたという。現代語については、生成文法による研究が盛んになるにつれて、松下文法の見直しが行なわれつつある。

音韻の研究については、音声面の関心が高まり、情報工学の成果に国語学者も目をつむっていらなくなりました。文字・表記は、期待されながら、この二か年は沈滞の時期だったらしい。展望

記事の内容も「音韻」との重複が目立った。文字・表記は、その研究分野を確立することから始めなければならぬ状態がまだ続いているらしい。

言語生活の研究は、社会言語学への傾斜が著しいというが、もともと日本の言語生活研究はアメリカ流にいえば「社会言語学」と言うべきものであった。方言研究についても、「社会言語学」的な観点が導入されつつあるという。いずれも流行に終らないようにしたもののである。

文章・文体については、この二か年に十余冊の単行本が出たという。実用につながりやすいからだと思う。もっぱら現代文章の文体的研究だったのが歴史的文献の文体研究に及びはじめたことは、よくやく実用から離れたところで文章・文体研究が行なわれるようになった証拠である。数理的研究は電算機の発達普及にともなうに、国語学畑だけでなく、情報工学の方面からも文学作品や文章の研究が行なわれつつある。展望の執筆者も注意しているように、研究の主体は電算機ではなく、研究者自身であることを忘れてはならない。

本輯の各展望記事を通じて見られる特徴は、みな予定頁を超過した上、最後は羅列方式をとって情報を提供している。こうなったのは執筆者の責任だけとは言えないと思う。ともかく著書や研究論文の数があまりにも多いことから来ている。それは、そういう刊行を可能にしている現代の日本の経済力が働いていると思う。しかし、これ以上多くなれば、必然的に展望は重点主義、傾向指摘方式を探らざるをえなくなるであろう。

どんな科学でも同じことであるが、国語学もその他の科学の中で

完全に閉じた世界をつくって、孤高を持するわけにはいかない。第一、国語学が対象とする日本語は、「言語学」をはじめ実に多くの科学が対象にし出したからである。これは、日本だけでなく、世界的な傾向である。

それが日本で極めて具体的な体制としてあらわれたのが文部省科学研究費の特定研究「言語生活を充実発展させるための教育に関する基礎的研究」である。この研究の外的特徴は、まず、昭和五二・五三・五四年度にわたって、合計五億九千七百万円の科学研究費が与えられ、三七四人の研究者が参加した大規模な研究組織であることである。研究グループは、

- 1 言語の基本構造
- 2 思考と言語
- 3 言語表現
- 4 談話行動
- 5 第二言語教育
- 6 言語の発生
- 7 言語の機械処理

の七つに分かれる。本輯の「展望」の項目と比べてみると、生成文法による「言語の基本構造」が「文法」と関係し、「言語表現」と「談話行動」が「言語生活」と関係し、「言語の機械処理」が「数理的研究」と関係するぐらいである。全体に、グループの立て方と、展望の分類とは基準が別である。展望にある項目で明らかに「特定研究」にない項目は、国語学史、国語史、文法・語彙・音韻・文字表記の言語構造、方言などである。ことに目立つのは言語の通時的研究（国語史）がないことである。また、単に記述的研究ではな

く、教育に結びつく研究だということである。

七つの研究グループは、分かれて四十三の具体的なテーマとなる。その研究代表者の顔ぶれを見ると、出身学部別に言って、文学部・理学部・工学部・医学部にわたる。さらに専門別に見ると、国語学・外国語学・言語学・教育学・心理学・社会学・哲学・物理学・数学・情報工学・電気工学・通信工学・計測工学・音声医学・脳科学などにまたがる。

次に、具体的な研究テーマを各研究グループから適宜一つずつ選んで掲げておく。

- 1 日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究 井上和子（国際基督教大学教授）
- 2 言語による知識の最適な記述・体系化とその教育への応用 藤崎博也（東大工学部教授）
- 3 文字表現力と音声表現力との関連 林四郎（筑波大学教授）
- 4 社会関係・場面に応じた言語行動 柴田武（埼玉大教養学部教授）
- 5 外国語としての英語の Hearing 能力形成要因の実証的研究 小池生夫（慶大経済学部助教授）
- 6 言語機能に対する大脳の統御機構とその障害に関する研究 豊倉康夫（東大医学部教授）
- 7 計算機による日本語文章の解析に関する研究 長尾真（京大工学部教授）

以上のうち、1を除いては、今日の国語学が「展望」によって展開している分野とはかなりかけ離れていることを感じる。ここには「言語情報科学」とでも言うべき一つの新しい分野が誕生しつつあ

るようである。

こうした諸科学による日本語研究に押されて、国語学が守ることのできるのは、歴史的研究（国語史）と方言研究しかない。これは古い研究分野に帰ることを意味する。第九輯（昭二六）の展望は日本の柱を立て、(1)国語学、(2)方言、(3)国語教育、(4)国語問題とするが、国語教育と国語問題は第七十三輯以降とりあげていないから、残るのは国語学と方言である。この国語学が国語史に傾斜したものでならば、この二つの分野が国語学最後のとりでとなるといっているのである。

ここでわれわれが態度決定を迫られるのは、古い狭い分野に引込んでしまいか、特定研究で象徴される『言語情報科学』まで含めるかである。それは、国語学は過去を知ることだけで満足するか、将来に対しても何か語ろうとするかの選択でもある。

——埼玉大学教授——